

主権者及び消費者の育成に係る指導の充実に関する実践研究
令和 5 年度実施報告（概要）

市町名： 田尻町

1. 類型

【類型 I ①】主権者に必要な資質・能力の育成に係る小学校又は中学校における実践
(ア. 社会科における指導)

2. 実践校について

実践校名	(ふりがな) たじりちょうりつしょうがっこう 田尻町立小学校	
全校児童・生徒数	実践研究の対象	
4 4 8 人	(学年) 第 5 学年	(児童数) 6 9 人

3. 実践校における実践内容

(1) 概要

第 5 学年の児童を実践研究の対象とし、社会科の学習を軸とした、地域社会を「知る・学ぶ」活動を通じて「疑問を持つ・課題解決に向けて取り組む」学習へとつなげる。農業、水産業、環境等に関する単元学習において、地域の課題と結びつけて学び、その課題解決に向けて自分たちにできる取組みを提案し、実行に移していく。本実践について、地域の漁業協同組合、農業組合、役場職員等の方々と連携し、地域全体を巻き込みながら進める。

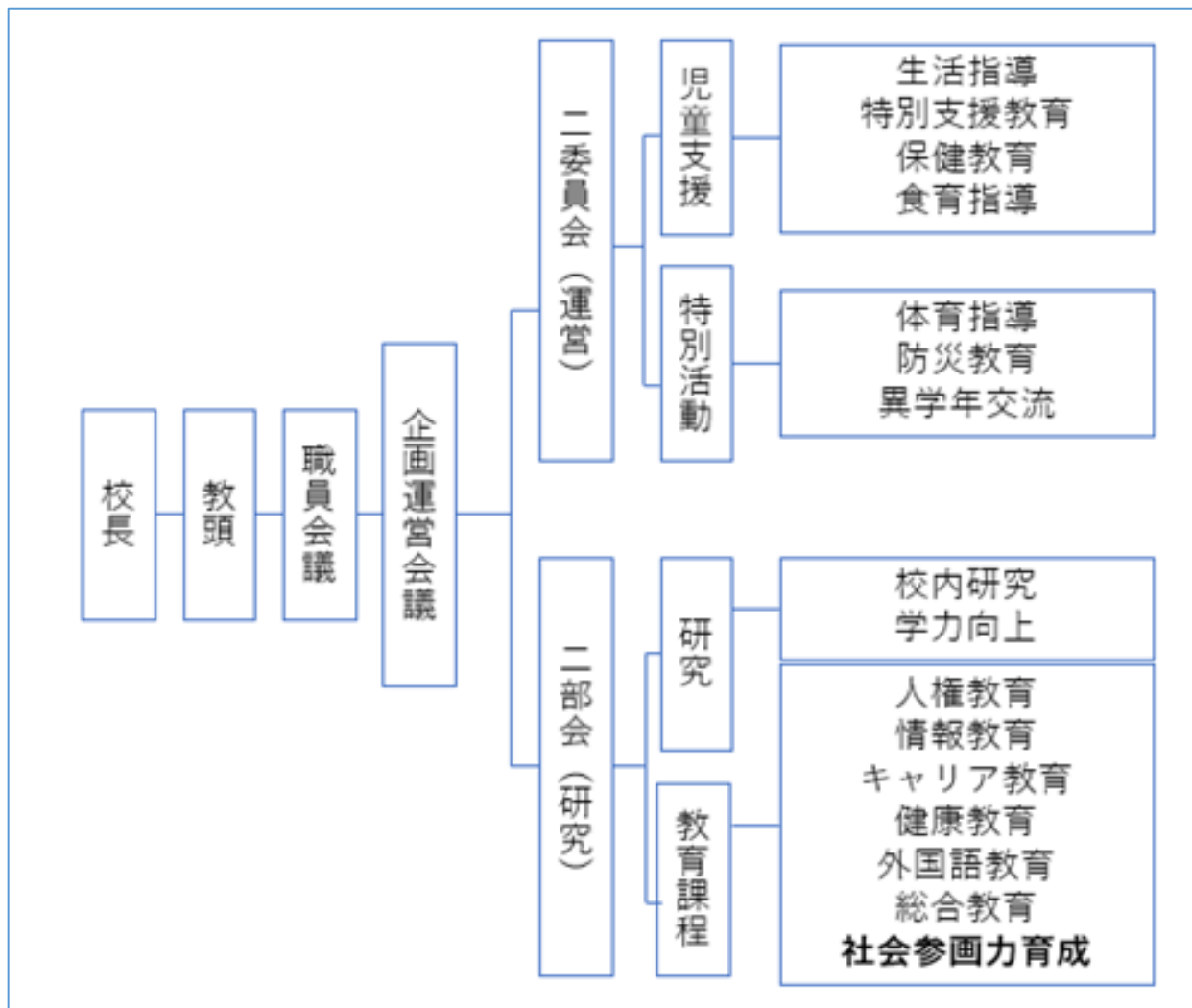
(2) 1 年目(令和 5 年度)の実践内容

子どもたちのつけたい力を「よりよい地域社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする力」とし、その育成をめざす実践研究を進めた。そして、社会科の授業づくりにおいて、4 つの観点「①現実社会を見て学ぶ」「②人の働きを見て学ぶ」「③根拠をもって議論する」「④自分事としてよりよい社会を考える」を大切にしながら取組みを進めた。「水産業のさかんな地域」「これからの食糧生産とわたしたち」「低い土地の暮らし・高い土地の暮らし」の単元において、我が国の課題や現状を学習し、議論を通して本町の課題や現状とを照合しながら学習を展開してきた。その中で、我が国と本町における共通点や相違点を整理することで、より自分事として我が国の課題や現状を

捉えやすくし、最後によりよい社会にするための考えをまとめるようにした。

また、社会科において学習してきたことを活かしながら、本町における課題解決に向けて、実践的な活動につなげる学習を総合的な学習の時間と関連させながら学習を広げてきた。

4. 実践校における実施体制



5. 各研究テーマについて、1年目の実践を踏まえた成果等

【類型Ⅰ①】主権者に必要な資質・能力の育成に係る小学校又は中学校における実践
(ア. 社会科における指導)

＜児童生徒が社会的事象に興味・関心を持ち、自分事として捉えながら、児童生徒に考えさせる教育活動を行うため、どのような指導上の工夫が考えられるか。＞

児童生徒が社会的事象に興味・関心を持ち、自分事として捉えられるために、「現実社会を見て学ぶ」の観点を大事にし、身近な給食の献立や漁業体験など、児童生徒の実生活上の経験や地域の産業など、身近に実感することができるものを教材として取り上げた。また、「人の働きを見て学ぶ」ことを大切にしたい。実際に社会に参画し、働いている人の

思いや努力、工夫等について知る機会を設定することにより、子どもたちは社会の課題を解決する必要性等を身近に感じることができ、社会的事象について主体的に考えることができた。

＜発達段階に応じた情報活用能力の育成(特に、社会的事象に関する情報を収集し、その情報を公正に判断し、自分の意見をもつこと)に関して、どのような指導上の工夫が考えられるか。＞

社会科の学習における情報活用能力として、実地調査や資料から情報を収集し、目的に応じて表やグラフを活用し、整理できる力に重点を置き学習を進めてきた。また、学級全体やグループなどで議論する機会を多く設定し、他者の意見を聞いたり、自分の考えを発表したりする機会の充実を図った。そのことにより子どもたちは、整理された情報をもとに、自分たちの考えの根拠としたり、新たな考えや意味を見出したりすることができた。

＜教科等横断的な学習を充実するために、教育課程の編成に当たってどのような工夫が考えられるか。＞

社会科で学習したことと、総合的な学習の時間における地域社会の課題解決について考え、行動する学習とを関連させ、子どもたちが生活している田尻町のことを教材として扱った。学習活動全体を通してつきたい力を明確にし、各教科等における学習を展開するというカリキュラム・マネジメントを行った。そのことにより、社会科の学習だけで、よりよい社会の実現に向け、自分たちの考えをまとめるだけでなく、総合的な学習の時間において実際に行動へと発展させる学習に取り組むことで、学習後も主体的に考え続けることができた。

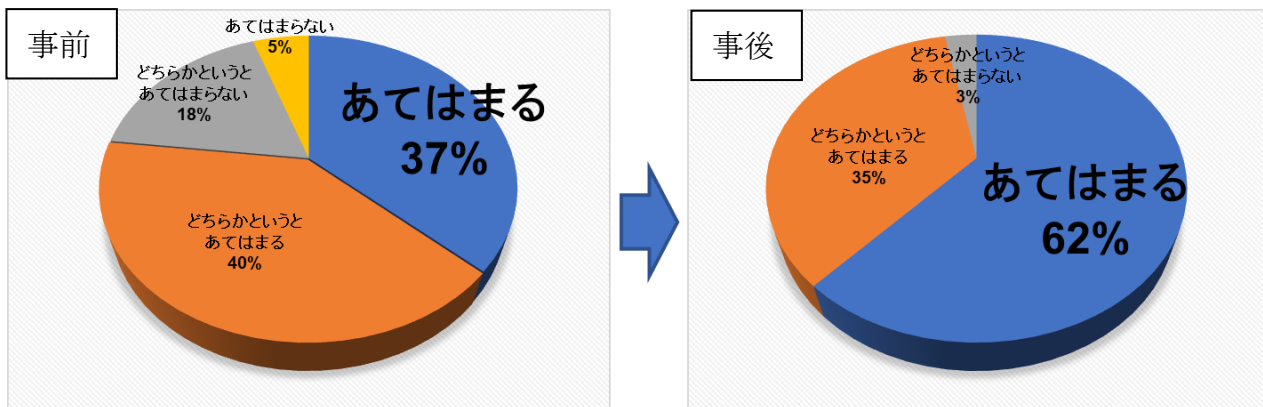
＜成果と課題＞

このような取り組みにより、成果指標としていたアンケート項目「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」の肯定的回答の割合が、事前（77％）から事後（97％）で向上し、社会参画意識の向上につなげることができた。しかし、社会科の学習と地域社会の課題解決について考え、行動する学習とを効果的に関連させることについては、明確な整理に至らなかった点が課題である。

令和6年度は、この成果と課題を踏まえ、実践研究の対象を第6学年とし、児童一人ひとりが地域社会の中の責任ある一員であるという意識を持ち、主権者として必要となる資質・能力を高められるよう、引き続き「よりよい地域社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする力の育成」をめざす実践研究を進めたい。

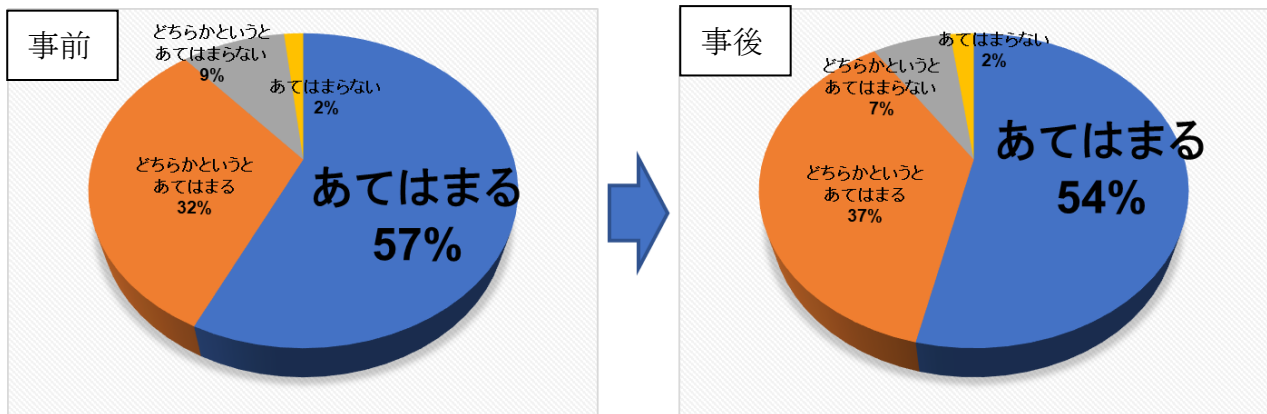
成果

アンケート「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがある」

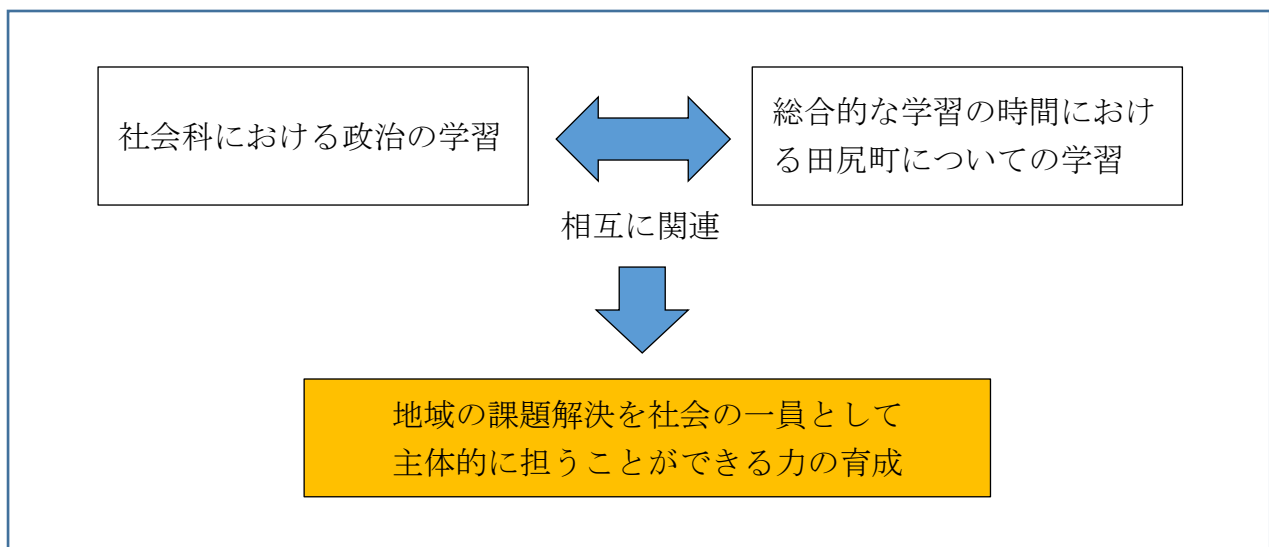


課題

アンケート「話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりしている」



次年度に向けて



主権者及び消費者の育成に係る指導の充実に関する実践研究
令和 5 年度実施報告（実践校における実践内容の詳細）

市町名： 田尻町

1. 類型

【類型 I ①】主権者に必要な資質・能力の育成に係る小学校又は中学校における実践
（ア. 社会科における指導）

2. 実践校名

田尻町立小学校

3. 実践校における 1 年目（令和 5 年度）の実践内容

（1）単元名：水産業のさかんな地域

①現実社会を見て学ぶ

本単元の指導にあたって、導入において子どもたちが日頃食べている給食を教材として扱い、食材に着目させた。献立表の材料欄から、魚を使った献立が多く見られ、自分たちの食生活が日本の水産業に支えられていることに気づくことができた。子どもたちは魚を使った料理を日常的に食べているにもかかわらず、水産業についてはほとんど知らないという認識を確認し、学習問題や学習計画につなげることができた。

②人の働きを見て学ぶ

日本の水産業における各漁業の特徴や地域の様子から基本的な知識を確認した後、水産業を身近に感じ、より興味関心を抱きやすいよう田尻町漁業協同組合の協力のもと漁業体験を実施した。漁業体験を通して、実際に水産業に従事する人の働きを見ることで、人々の工夫や努力について考えさせることができた。子どもたちは、実際の漁業の様子や人々の働きから自分たちの生活が水産業によって支えられていることを実感することができ、学習内容に対する興味・関心を高めることにつながられた。



漁船に乗船して漁に出る準備
をしている様子



漁獲したものを処理し、商品に
なる過程を見学している様子

③根拠をもって議論する

学級全体やグループなどで議論する機会として、水産業にかかわる資料を見ながら気づいたことを出し合う等、日本の水産業がどのような課題をかかえているのか考え、議論することができた。また、調べたり議論したりする学習を通して、あらためて水産業に従事する方から聞き取りを行いたいという思いが生まれ、聞き取り学習を行うことで、「漁業で働く人数が減少していること」や「漁業生産量や消費量が減少していること」など、日本がかかえる水産業の課題に対する認識を深めることができた。

子どもたちは「自分たちにできることはないか」と、自分事として考えられている様子がふりかえりからもわかった。



漁師の方から水産業の現状と課題に関する話を聞いている様子



漁師の方から聞いた話をもとに、現状や課題を整理している様子

④自分事としてよりよい社会を考える

総合的な学習の時間における、体験学習等と関連させて、水産業がさかんな地域の人たちのくふうや調べたことをまとめる学習に取り組んだことにより、水産業を身近なものとして捉え、自分事として日本を水産業の課題を考えることができた。水産業の課題解決に向けて思考するうえで、環境問題や食生活など多面的に考えることができた。

(2) 単元名：高い土地の暮らし あたたかい土地の暮らし

①現実社会を見て学ぶ

社会科の学習において、群馬県嬲恋村や沖縄県について調べ、人々のくらしや産業における工夫をまとめることで、各地域において地形や気候などの自然条件から見て特色ある地域があること、人々が自然条件の中で工夫しながら生活していることを理解することができた。その学習をふまえ、総合的な学習の時間において、田尻町における産業の工夫に着目し、地域の特産品や特色について考えたり、田尻町のホームページや観光協会について調べたりして、田尻町が行っている工夫や気づいたことを話し合い、より人々のくらしや工夫に着目しやすいよう工夫をした。このように、総合的な学習の時間の学習と関連させたことにより、子どもたちは、自らが生活している地域の特色と社会科で学んだ地域の特色について、比較する視点をもつことができたと考えている。



田尻町の産業や観光業について、どのような工夫が行われているか調べている様子

②人の働きを見て学ぶ

社会科の学習と関連させ、総合的な学習の時間において、田尻町の自然環境における人々の工夫に着目し、それに関わる方をゲストティーチャーとして招聘し、大阪湾の環境や観光振興の取組みを聞くことで、地域の特色の様々な可能性を考えられるよう工夫をした。田尻町は大阪湾に面しており、大阪湾の環境課題は自分たちの生活や身近な産業に大きな影響を及ぼすものであるので、子どもたちは興味・関心をもって学習に取り組むことができた。



田尻町の自然環境として、大阪湾の環境についての話を聞いている様子

③根拠をもって議論する

社会科の学習において、日本の様々な地域がその地域にあった特色を生かした観光業や農業を行っていることを学習した。その学習を総合的な学習の時間と関連させ、日本各地での特色や工夫が自分たちの地域でも活かせることはできないか、日本全国の実例を根拠として話し合いが行えるよう工夫をした。子どもたちは、田尻町の特色を活かすことについて、意欲的な議論をすることができたが、社会科で学習した「高い土地の暮らし」「あたたかい土地の暮らし」における特色や工夫を活かすというところまでは至らなかった。社会科の指導において、自分たちの地域でも活かせる工夫かどうかという視点を持てるような指導の工夫が必要であったと考えている。

④自分事としてよりよい社会を考える

社会科の学習において、日本各地のさまざまな地域の特色を生かした観光業や産業についてまとめ、発表を行った。その学習と関連して、総合的な学習の時間において、田尻町の観光業の活性化について自分事として考えられた。一方、社会科で学習した地形や気候などに着目して、その中で行われる人々の生活や工夫という面では、田尻町との関連性が弱くなってしまい、子どもたちの主体的な活動には発展しなかった。自分たちの地域の特色について学ぶことを、社会科で学ぶ日本各地の特色への興味関心につなげるためには、地域に特化した特色だけでなく、様々な特色を活かす各地域における工夫のアプローチに着目させる指導の工夫も必要であったと考えている。

（３）これからの食料生産とわたしたち

①現実社会を見て学ぶ

実際の食品を提示し、日本で生産されたもののみを使用した場合と比較することで、日本の食料自給率について興味関心を持てるよう工夫をした。また、既習の農業や水産業の学習を振り返りながら日本の食料生産が抱える課題と結び付けて学習した。子どもたちは、日本の食料は輸入に頼っていることを数値的なデータだけでなく、日常生活と結びつく視覚的な教材を活用することにより、実感を伴いながら知ることができた。また、既習の産業と結び付けて学習したことにより、地域産業の活性化の必要性について改めて考える機会となった。



食料自給率について考えるために使用した食品画像

②人の働きを見て学ぶ

社会科の学習において、食料を安定して確保するために、食料自給率を高めることの必要性や日本各地で地産地消の取組みが進められていることを学習した。それを総合的な学習の時間と関連させ、田尻町における地産地消の取組みを調べる中で、実際に田尻町の漁港で開催している朝市に出向き、アンケートなどで意識調査を行い、食料生産の工夫をより身近に感じられるよう工夫をした。朝市に来られている方のニーズや働く人の姿を直接見ることは、自分たちにできることを考えるきっかけとすることができた。



漁港の朝市に訪れている方に聞き取り調査をしている様子

③根拠をもって議論する

「これからの日本の食料生産について大切なことは」という問いに対して、我が国の食料自給率について、他国の比較や現在の食生活に関連させながら、話し合いを行った。話し合いを通じて、この学習課題を解決するための方向性として、「食生活に関すること」「輸出入に関すること」「値段に関すること」などテーマを設定し、それぞれグループに分かれて情報を収集したり、まとめたりしながら学習を展開した。これまでの社会科や総合的な学習の時間で学習した内容（ゲストティーチャーから聞き取った内容やアンケート結果など）を根拠として議論することは、学んできたことを活かして、知識・技能の定着、

思考力・判断力・表現力等の向上を図ることにつながったと考えている。

④自分事としてよりよい社会を考える

社会科の学習において、食料自給率を上げるため、食料生産を増やすために必要なことを考え発表した。より自分事として学習できるよう、総合的な学習の時間において、田尻町の学習を関連させてきたことで、田尻町で取り組んでいる地産地消の取組みを全国でも展開する考えを発表するなど、地域から日本全体へ視野を広く持てることができた。